10月25日(水)　朝礼のお話

「風呂敷」エコで便利な日本の文化

今日のお話はこの布についてです。これ、「フロシキ」といいます。どこのお家にも一枚や二枚はたいていあると思います。校長先生の家にも何枚もありました。このフロシキ、何に使うかというと、主にいろいろな物を包んでしまっておいたり、持ち歩いたりするために使われます。でも、あまり目にすることはないですね。でもこのフロシキ、最近また注目されるようになった優れモノなのです。今日はこのフロシキのお話をしたいと思います。

そもそもこの布がどうして「フロシキ」と呼ばれるかということからお話したいと思います。フロシキのように布で物を包んだりすることは今から1200年前ごろには記録に残っています。そのころはまだフロシキという名前はなくて、「ころもつつみ」とか「平包み」などと呼ばれていたようです。時代が少し進んで室町時代、今から600年ほど前のこと、大きな町にはお風呂屋さんが作られるようになりました。当時はまだ一部のお金持ちやえらい人だけしかこのお風呂屋さんに行くことはなかったようですが、その人たちはお風呂に行く時に着替えなどを持っていくために布で包んでいくようになりました。そして、お風呂から出るとこの布を床に敷いてそのうえで着替えをしたりしました。当時はまだ床もきちんとしていなくて、きれいになった体で床に座るのはいやだったんでしょうね。そこでこの着物を包んで持ってきた布をお風呂の床に敷いたわけですね。そうです、この「お風呂に敷く」ということからこの布を「風呂敷」と呼ぶようになったわけですね。また当時のお風呂は今のようにお湯に入るのではなく、サウナのような蒸し風呂が普通で、この足元に布を敷いていたことから風呂敷と呼ばれるようになったともいわれています。

さてその後この風呂敷はいろいろな大きさのものが作られ、物を包んだり、運んだりするために人々の暮らしにはなくてはならない物として活躍してきました。時代劇などをみると風呂敷で物を運んでいる様子がたくさん出てきます。しかし、戦争のあと便利なバッグがたくさん使われるようになって風呂敷を使う人も場面も少なくなってしまいました。

でも最近になってこの風呂敷がとても環境にやさしい道具だということで再び注目されています。つまりエコバッグですね。風呂敷は単なる一枚の布ですが、それだからこそバッグよりも様々な使い方ができます。例えば、このように瓶やスイカのようなバッグでは運びにくい物を運ぶこともできますし、小さな物なら手提げのようにすることもできます。いらなくなれば一枚の布ですからたたんでどこにでもしまっておけますし、何度でも使うことができます。これはなかなかエコな道具ですね。

さて、今日は風呂敷のお話をしました。あなたの家にもきっと風呂敷があると思います。使ってみてはどうでしょうか。今日のお話は図書室にあった風呂敷の本を参考にしました。興味のある人はぜひ読んでください。今日も最後まで一生懸命聴いてくれてありがとう。これで今日のお話を終わります。